

巻 頭 言

第二工学部 70 周年によせて

生研の広報委員長として、巻頭言の執筆を依頼されるにあたり、人の縁とは不思議なものであると改めて痛感しております。と申しますのも、このたびの特集コラム執筆者の一人である第二工学部1947年ご卒業の平林眞先生は、私が東北大に在籍していた15年前から親しく聲咳に接して、ご指導いただいていた大先輩だからです。

第二工学部出身の先生と東大生研の教員である私が知り合いであることについて、何ら違和感を覚えない人が多いでしょう。しかし、生研に赴任するまでの私は、京大→MIT→東北大と転々と研究機関を渡り歩き、東大とは縁もゆかりもありませんでした。11年前に東大生研に赴任するまでは、この研究所の生い立ちどころか、東大の概要すら知りませんでした。赴任してまもなく、私を東大に引っ張って下さいました前田正史先生（元所長、現理事・副学長）から生研の沿革についてお教えいただき、生研の母体が、平林先生のご出身の第二工学部であることを初めて知り、偶然の符合にとても驚いた次第です。

偶然の始まりは、私が東北大の助手として行なっていたチタンの研究に、やはり第二工学部のご出身の二上菱様のご興味を示されたことが契機でした。第二工学部時代に二上様とご親友で、1989年まで東北大の金属材料研究所所長を務めておられました平林先生は、当時、すでに退官されておられましたが、後輩を通じて私を紹介していただいた次第です。この不思議な人の繋がりをご縁となり、今でも、親子以上の年齢差がある大先輩が私の研究会に足を運んでくださり、陰に陽にご指導、ご支援していただいております。このように、第二工学部ゆかりの大先輩お二人に身をもって示していただきました教育や研究のご支援に対するご厚恩に報いるためにも、微力ながらも、この特集で後世に第二工学部の記録を残すという役目に係わることができ、広報委員長といたしましても誠に光栄です。

第二工学部は、1942年の開学から、1951年の閉学までの間に、8回の卒業生を世に送り出し、その数は、1954年卒業の工学部分校の卒業生を合わせて、2,768名に達しています。第二工学部は産業力の強化を目指して工学研究に特化した人材を育成すべく新設されました。当初は、既存の第一工学部と同一の規模で西千葉の15万坪という広大な敷地に設置され、工学部への入学生は、学生の希望にはよらず、大学側から一方的に第一か第二に割り振られたという存在でした。また、約90名の教員の半数は産業界から抜擢したという産学協同のユニークな組織でもありました。卒業生は、戦後の産業発展に多大な貢献をし、殊に工業の復興に大きな足跡を残しました。中には、日本の技術者、経営者としての際立った地位を占め、また、研究者あるいは教育者として社会で活躍した方々が多数おられます。第二工学部を母体として1949年に発足した生研は、その後も、研究と教育を通じて新しい技術の開発に邁進し、工学研究のトップ・インスティテュートとしての地位を確立し、今や世界をリードする研究所として社会に貢献しています。

今回、第二工学部コラムの特集を組むことにより、第二工学部の先輩方が残された偉業を回顧するというかたちで、少しでも多くの記録を後世に残すことが出来れば幸いです。現在、生研同窓会が中心となって、第二工学部の活動記録を書籍として残す作業も進めておりますが、先輩方の数々の貢献を記録として後世に伝えることは、私達の重要な使命の一つであると考えています。

末筆ではありますが、本特集に寄稿して下さった先輩方をはじめ、今日の生研の礎を築いて下さった第二工学部の関係者の方々に對し、あらためてこれまでのご努力とご苦勞に敬意を表し、心より御礼を申し上げます。

2012年 5 月25日

生産技術研究所 広報委員長 岡部 徹

参考文献：岡部 徹：“第二工学部の大先輩との不思議な縁”，風薫る野辺に 第二輯（東京帝国大学第二工学部冶金学科 昭和二十二年九月卒業生 卒業60周年記念文集）（2008）pp.7-9.